

友愛植林訪中第 26 次訪中団に参加して

東北大学経済学部 4 年 秋山 俊樹

互いの顔が見える円卓

今回の訪問で印象に残っているのは、円卓を取り囲んでの食事の風景である。中国の食事の席では、円いテーブルを取り囲み食事をする。訪問中は、中国のスケールの大きさを感じさせるような特大の円卓で食事をした。最初に見たときにはその迫力と豪華絢爛の様に息をのんだ。と同時に、丸いテーブルを皆が囲むため一人一人の顔がよく見えることに気づいた。食事中は皆が席を回り一人一人と言葉を交わし乾杯をする。杯をかわすともう気持ちが通じた気分になる。全員が顔と顔をつき合わせる中国式の食事の風習は、人々の距離を埋めることを助ける。最初は緊張して落ち着かない私だったが、同席者の方々と話をしていく中で気も落ち着き、食事を終える頃には皆の顔と名前を覚えていた。

未来を見据えて

顔を向かい合わせるのが食事ならば、植林は、緑豊かな未来、という方向に向かって皆が目線を揃えて行うものだった。中国のボランティアの青年たちと一緒に、シャベルで苗木に土を被せていたときおそらく私と彼の頭の中では、10年後のこの土地に大きく育った木々の緑が萌える光景を描き、気持ちが一つになっていたのではないだろうか。同じビジョンを持つ者同士、お



互いを尊重し、力を合わせて活動している感じがした。現在、両国の間には様々な政治的不安が横たわっている。こうした状況だからこそ、本当に欲しい未来について顔を付き合わせて議論し共通するビジョンを見つけて、その方向へ向かって手を取り協力することができれば良いと思う。

日本友愛協会の取り組み

政治の場だけでなく民間においてもこの姿勢が求められる。このことを体現している日本友愛協会の日中緑化交流基金による植林事業は、これまでに驚くことに15年間(26回の訪中)も続けられている。日中緑化交流基金の助成で行われた植林面積は東京23区を上回ると聞く。長い間継続され幹の太くなった交流に関わることができて私は非常に幸運だった。鳩山由紀夫理事長の真摯な言葉による挨拶、心のこもった力強い川手団長の言葉からも、日本友愛協会が植林事業に向き合う様子が伺えた。

日中友好の樹を育てる
参加することができた者の
務めとして、こうした素晴らしい活動の存在を皆に知ら

せると共に、自分たちができることを仲間たちと考え、新たな日中友好の樹を育てていきたい。地理においても歴史的つながりにおいてもとても距離が近い日本と中国だからこそ、良きパートナーとして今後共に未来を創っていったら良い。それを担う当事者として自分の出来る努力を積み重ねて行きたい。

